

達度 ss の中分化型腺癌であった。肝内病変は胃病変に比し mucin 産生が少なく、HE 染色、CA19-9 染色等より胃癌とは独立したもので肝内胆管癌と考えられた。患者は術後1年1カ月の現在無再発生存中である。

重複癌といえども、根治術が施行されれば予後も期待できるので、積極的な外科治療を試みるべきであると考えられた。

24) 進行・再発胃癌に対する MTX/5FU 交代療法

梨本 篤・佐々木寿英 (新潟県立がんセンター新潟)
加藤 清・佐野 宗明 (病院外科)
筒井 光広・土屋 嘉昭

遠隔成績の向上、腫瘍縮小効果、50%生存期間の延長、症状の改善による Quality of life (QOL) の向上を end point として、予後不良な進行・再発胃癌に対し、MTX/5FU 交代療法を1987年3月より施行している。対象は Stage III, IV の治癒切除および相対的非治癒切除42例 (Adjuvant 化療群) と、明らかに癌腫が存在している非切除症例、絶対的非治癒切除症例、および術後再発28例 (Radical 化療群) である。

【結果】① Adjuvant 化療群では、1 生率 85.3% 5 生率 47.6% と良好であった。② Radical 化療群では 1 生率 38.5%、50%生存期間 9ヶ月であり、評価可能病変を有する20例では各々 47.4%、11.9ヶ月で、奏効率は 25.0% (CR 1 例, PR 4 例) であった。③ 副作用は高率にみられたが、致命的な障害はなく、安全性が確認され外来投与が可能であった。④ 化学療法による PS の向上が 82.1% (23/28) と高率に認められ、QOL の改善には充分寄与していた。

25) 大腸癌肝転移に対する治療

豊岡 正裕・新国 恵也
長谷川 潤・多田 哲也 (新潟県厚生連中央)
吉川 時弘・佐々木公一 (総合病院外科)

大腸癌では血行性転移として肝転移が他臓器の癌に比し高頻度に認められ、同時性肝転移が 4.2~25%、異時性肝転移が 10~20% の頻度で見られるといわれている。過去3年5カ月間に当院で外科的治療を受けた大腸癌症例は 278 例であり、そのうち、同時性肝転移は 23 例 8.3% に、異時性肝転移は 13 例 4.7% に認めた。これら大腸癌肝転移症例に対して、のべ 14 例に肝切除を (肝切除率 38.9%)、15 例に肝動注化学療法を行った。肝切除症例の 3 年生存率は 66.7%、無再発 3 年生存率は 38.1% で

あり、種々の要因により肝切除を断念し、肝動注化学療法のみを行った症例のうち 1 例 (手術時所見: H2, P0, S2, N1, 組織所見: pap, ss, INF γ , ly1, v1) に肝転移の消失 (CR) を認めた。以上、大腸癌肝転移症例に対し、良好な治療成績を得ることができたので若干の文献的考察を加えて報告する。

II. 特別講演

『癌治療とバイオケミカルモジュレーション—研究の現状と将来—』

癌研究会 癌化学療法センター 副所長
塚 越 茂 先生

第 234 回新潟外科集談会

日 時 平成 4 年 4 月 11 日 (土)
午後 1 時
会 場 新潟大学医学部
第 3 講義室

I. 一般演題

1) 脾仮性嚢胞内出血の 3 例

小山俊太郎・塚田 一博
吉田 奎介・武藤 輝一 (新潟大学第一外科)

1985 年以降、当科で経験した脾仮性嚢胞内出血を起こした 3 例につき検討した。症例 1 は妊娠を契機に発症した急性脾炎に続発する脾尾部嚢胞で胃-嚢胞吻合術施行後 12 日目に嚢胞壁からの出血による大量吐血をおこした。嚢胞内容の出血による大量吐血をおこした。嚢胞内容の不十分なドレナージが原因と考えられたが、保存的療法にて止血、軽快した。症例 2・3 は共に大酒家の男性で、急性脾炎にて保存的治療を受けたのち、それぞれ 9 カ月、10 カ月目に仮性動脈瘤破裂による嚢胞内出血を起こした。いずれも血管造影による選択的動脈塞栓術にて止血し得た。脾仮性嚢胞の治療としては炎症病巣の除去・出血の予防の観点から確実な切除が望ましいが、腸管との吻合術を行う場合には嚢胞内の十分なドレナージが必要と考えられた。また緊急止血手段として選択的動脈塞栓術が有効だった。